

ハンナ・アーレントにおける「はじまり」の概念（1）

—著書『革命について』を中心に—

松本 智治

日本大学大学院総合社会情報研究科

The Concept of “Beginning” in Hannah Arendt (1)

— In Reference to her Work *On Revolution* —

MATSUMOTO Tomoharu

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

In this paper I will be concerned with Hannah Arendt's notion of the “beginning” as the key concept of her philosophy. Written by a person regarded as one of the most important political thinkers of the 20th century, the work *On Revolution* has been regarded, by commentators almost unanimously, as a work of political thought which compares the French Revolution with the American Revolution in terms of political ideas underlying historical events. However, Arendt has this to say: “revolutions are the only political events which confront us directly and inevitably with the problem of beginning.” These words show that it is not political events of revolutions but the problem of “beginning” that is central and essential to the subject of the book. Critically examining comments and studies made up until today about the concept of “beginning” and “natality”, I will make a thorough-going theoretical consideration of the “beginning” and its significance or Arendt's philosophy in *On Revolution*.

I. 序論

1. 問題の所在

ハンナ・アーレント¹ (Hannah Arendt, 1906-1975) —『全体主義の起原』(*The Origins of Totalitarianism*, 1951)、『人間の条件』(*The Human Condition*, 1958)²などの著書で知られ、その死後“A WOMAN OF THIS CENTURY”³と称えられるなど、20世紀を代表する政治思想家として評価される女性哲学者である。彼女の思想には、古代ギリシア的な公共空間と古代ローマ的共和政体の復権を唱える伝統理念擁護のコンサヴァティヴな側面と、政治参加の自由と多元性・複数性 plurality の確保を訴えるラディカルな変革志向の姿勢の両者がみられる。一見「水と油」のように相容れず、ベクトルの異なるこの二つの志向性が、彼女の内面においては十分にアマルガム化されており⁴、古典古代の教養を有機的に連関させながら展開する彼女の立論は、既成の政治概念を“脱構築”するものであるといえるだろう。こうした特徴的な思

想は、1990年代以降、冷戦構造の終結とグローバリズムの進展の中で一層注目を深めており、著作の翻訳、手紙や遺稿集、研究書、評伝など多くの書籍が近年米国や日本において刊行されている⁵。

本稿は、アーレントの主著の一つである『革命について』(*On Revolution*, 1963)を取り上げる。ナチズムの構造を明らかにした『全体主義の起原』や彼女の政治思想の代表作『人間の条件』が、しばしば「ナチスの全体主義と対決した」とか「古代ギリシアのポリス政体を理想として」などといった枕詞とともに彼女の代表作として語られるのに対して、『革命について』そのものは、従来比較的言及されることは少なかった。しかしながら、例えば代表的なアーレント研究者であるマーガレット・カノヴァン (Margaret Canovan) はその著『アレント政治思想の再解釈』(*Hannah Arendt: A reinterpretation of her political thought*, 1992)において、『革命について』がそれほど言及されなかった理由として本書の内省

的・暗示的性格を認めつつ、「アレントの著作のなかでは最も理解されることの少ない、また最も評価されることの少ないこの著作の知的な重みは、たしかにほかのふたつの著作と同等に扱うに値するであろう」と、その重要性を述べているのである⁶。

こうした知的状況の中で、我が国においてこの『革命について』は、通常次のようなイメージで語られてきた。——『革命について』においてアーレントは、フランス革命（およびそれにつながるロシア共産主義革命）に対してアメリカ革命を評価した。多数性・複数性を重視し、『人間の条件』で述べられる「活動 action」の空間としての公的領域の再構築を求め、参加型民主主義の重要性を述べた。「自由の創設 *Constitutio Libertatis*」としての革命を説き、アメリカ合衆国における水平的権力としての連邦制の意義など、「権力」「権威」の基礎付けについての政治思想上の議論を展開した。総じて、古典古代のギリシア・ポリス政、ローマ共和政の在り方を理想とした——⁷というものである。こうしたイメージはそのまま、フランス革命よりもアメリカ革命を重要視する保守的で伝統重視の思想家というアーレント像や、古代ギリシアのポリスを理想とする復古主義的・理想主義的で直接民主政や参加型民主主義を重視する思想家としてのアーレント像を形成してきた。また、1980年代後半に起きた東欧の市民革命とアーレント的な革命パラダイムとの関係も随所で議論されてきた⁸。

しかしながら、『革命について』序章の最後の段落に「革命の現象に、はじまり *beginning* の問題がどのような意味をもつかは明白である」⁹とあるように、また第一章冒頭で「革命は、直接的かつ必然的にわれわれをはじまりの問題に直面させる唯一の政治的事件」¹⁰と述べられているように、『革命について』においては、一貫してこの「はじまりの問題」を明らかにし、またいかにして解決するかがテーマとなっている。「はじまり」という、この特徴的な概念を明らかにすることなく、『革命について』を単なる政治思想書として安易に片づけてしまっては、アーレントの真意、そして思想の全体像をとらえることはできない。

そしてまた、この「はじまり」の論点は、アーレ

ントの主著『人間の条件』における「活動的生活 *vita activa*」の三範疇である「労働・仕事・活動 *labor, work, action*」のうち、もっとも重要な「活動」を意味づける非常に大切な論点となっている¹¹。さらに、『革命について』の末尾では、革命の「失われた宝」としての公的自由（公的幸福）を取り戻すために必要とされるのは、「はじまり」を想起させることのできる「記憶 *memory*」と「回想 *recollection*」である旨が述べられている¹²。この問題意識はそのまま『過去と未来の間』（*Between Past and Future*, 1961, 拡大版 1968）の序「過去と未来の間の裂け目」の問題意識へと連続している¹³。

以上の点を踏まえるならば、『革命について』を単に 18 世紀末のフランス革命とアメリカ革命の内容を比較して、政治体制の自由を創設することの大切さを力説したという、政治体制論・政治思想論の観点からのみとらえるのではなく、アーレントの歴史哲学、時間論という観点、すなわち「はじまり」が歴史の動的なプロセス・行程のなかで、いかにして可能かという観点から考察することも可能であるはずである。これはまた、ハイデガー（*Martin Heidegger*）やヤスパース（*Karl Jaspers*）¹⁴に師事したドイツ実存主義哲学の徒としてのアーレントの哲学的側面と、ナチス全体主義や第二次世界大戦後のアメリカ社会の病理というアクチュアルな問題に対して発言を続けた評論家・政治思想家としてのアーレントが交差する書物として、この『革命について』を取り上げるという筆者の問題意識にも基づいている¹⁵。

2. 「はじまり」——論者の諸議論とその位相——

さらに、我が国においてはここ近年、アーレントの「はじまり」の概念が注目を集めており、アーレント研究のひとつのトレンドともなっている。

例えば山口充は、『人間の条件』がもっている最も情熱的なメッセージは、人間の出生 *human natality* と始まりの奇蹟 *the miracle of beginning* を思い出させることである」という、カノヴァンが『人間の条件』第二版序文に寄せた一節を紹介しつつ、「出生」と「始まり」の概念は、「アーレントの全思想を支える根底をなしているように思える」と、はじまりを

巡る研究の意義を述べている¹⁶。また教育思想の切り口からアーレントを研究する小玉重夫は、『人間の条件』におけるアーレントの「出生」の思想に注目し、「ギリシアのポリス的な公共性を肯定的に描いている」と言われる従来のアーレント像ではなく、「ユダヤ、ヘブライ的系譜」につながる視点から彼女の思想の根幹を解明する必要性を述べている¹⁷。

さて、こうしたアーレントの「はじまり」の概念をめぐる研究者の議論には、三つの位相があると筆者は考えている。

第一は、人間の「出生 *nativity*」という、個々人の実存としての「はじまり」にかかわる研究である。これは、森川輝一『〈始まり〉のアーレント』（岩波書店、2010年）が代表的である。森川は本書のなかで、アーレントの「出生」の概念を「アーレントの活動概念を解明するための鍵となる」¹⁸とし、「この世界の中に子どもたちが絶えず生まれ出てくるといふごく平凡な出来事 *Ereignis* の中に無数の新たな「始まり *initium*」の可能性を見出すアウグスティヌス」¹⁹の思想と、アーレントにおける愛の概念の関係を、「「出生」の思想の誕生」という視点から論じている。

第二には、アーレントの『人間の条件』に顕著に説かれている公的空間への参加（すなわち、活動的生 *vita activa*）を、「第二の出生」としての「はじまり」ととらえる考え方である。この観点での研究は、森分大輔『ハンナ・アレント研究——〈始まり〉と社会契約』（風行社、2007年）が代表的であるといえよう。森分は、「いうまでもなく「始まり」はアレントにとって重要な概念であった」²⁰とはじまりについての研究の重要性を述べながら、人間の「はじめる」という能力の意義、そして自由や「はじまり」の概念を巡って、公的空間に参加する人間の「社会契約」の開始という観点から一貫して論じている。

以上の二つの研究視点は、「はじまり」が一人ひとりの「自由意思」であるということ、すなわち全体主義に抗し、公的領域に参加するという「自由」をもたらすものとして、「はじまり」および「はじめること」が、どのような意味を持っているのかを解明しようとしたものであるといえよう。

第三に、主として『革命について』や『精神の生』

（*The Life of Mind*, 1978. 邦訳名は『精神の生活』）「第2部第IV章結論 16 自由の深淵と“時代の新秩序”（*novus ordo seclorum*）」、『過去と未来の間』等の議論を中心にしつつ、アーレントが評価するアメリカ革命とそのはじまりの問題（いわゆる「はじまりの難問」のこと、本論文Ⅲ章にて詳述）、革命における「権威」の生成、歴史（過去と未来の間）の裂け目としての「革命」、こうした論点を論じるもの、すなわちアーレントの革命論とはじまりを巡る議論との接合を論じるものがある。

この代表としては、石田雅樹『公共性への冒険 ハンナ・アレントと《祝祭》の政治学』（勁草書房、2009年。特に第5章「「世界」の変革は可能か——「革命」論から見た「法」と「権力」」）が真っ先に挙げられよう。石田は「はじまりはいかにして可能か」という「はじまりの難問」のテーマを「革命のアポリア」と表現し、その困難性を論じつつ、アーレントの言う「自由の創設」を「祝祭」という観点からとらえ直そうとしている。そのほか、仲正昌樹「アーレントとアメリカ革命」（情況出版編集部編『ハンナ・アレントを読む』情況出版、2001年、85-105頁）や川崎修『ハンナ・アレントの政治理論 アレント論集Ⅰ』（岩波書店、2010年。特に第3章第四節「権威と伝統」。この章の初出は1986年）においても、革命における「はじまりの難問」をめぐる議論がなされている。

このように、はじまりと『革命について』を巡っては、関連する論点の研究はいくつかなされているものの、ズバリ「革命とはじまり」そのものを巡っての包括的な研究は、管見する限りでは十分にはなされていないように思われる。カノヴァンが言うように『革命について』は『人間の条件』に匹敵する内省的・暗示的深みを持つアーレントの主要著書であり、また森分大輔が述べるように「はじまり」はアーレントにとって重要な概念であるにもかかわらず、これまでこの両者を巡っては十分な議論がなされてこなかったといえよう。彼女のはじまりに関する研究が進展しつつある今、「革命とはじまり」という重要な二つの概念について、改めて包括的な研究を進める必要があると思われるのである。

なお、アーレントのはじまりを巡る議論は、処女

作『アウグスティヌスにおける愛の概念』（*Der Liebesbegriff bei Augustin*, 1929. 英訳 *Love and Saint Augustine*, 1996. 邦訳名は『アウグスティヌスの愛の概念』）から『全体主義の起原』『人間の条件』『過去と未来の間』、そして本稿で取り上げる『革命について』、さらに晩年の『精神の生』に至るまで、生涯を貫いて非常に多くの問題領域に及んでおり、これらすべての著作にまたがる「はじまり」の概念を整理し明らかにすることは容易な作業ではない。この「はじまり」を巡る議論には、彼女の「出生と可死性 *natality and mortality*」「自由 *freedom / liberty*」「意志 *will*」「過去と未来 *past and future*」といった哲学的思考、そしてそれを可能とする古典古代の教養とドイツ哲学の伝統があり、一方でナチズムを生み出した大衆社会の問題、戦後アメリカ社会の病理、そしてアイヒマン裁判を巡ってのゲルショム・ショーレム（Gershom Scholem）をはじめとするユダヤ人たちとの論争と葛藤などの現実の政治の問題が横たわっている。そしてその双方があたかも「過去」と「未来」からの「力 *force*」となって迫ってくる、その「裂け目 *gap*」ともいえるべき「現在」に立って、それらからの力に抗するかのように紡ぎだされるアーレントの思考の世界なのである。

そこで本稿では、主としてこの三番目の位相における研究成果を活用しつつも、まずは『革命について』で述べられている論点を丁寧に整理する作業を行う。「はじまり」と内的に関連していると思われる「歴史の裂け目」の概念にも広く目配せする必要があるが、いずれにせよまずは『革命について』における「はじまり」の意味を徹底的に探究する必要がある。その過程において、適宜先行研究者の論点を参照しつつ、またそれらの検証も行いながら、より包括的に、アーレントが「革命」と「はじまり」をどのように捉えていたのかを検討する視座を得ることを目指してゆきたい。

《凡例》

アーレントの著作については、原書を下記の略号で記し参照箇所を記したのち、邦訳があるものは該当する箇所を併記した。

BPF : *Between Past and Future*, (introduction by Jerome

Kohn), Penguin Books, New York, 2006. (1st pub., 1961; expanded vol., 1968). (引田隆也・齋藤純一訳『過去と未来の間』みすず書房、1994年)

HC : *The Human Condition*, 2nd ed., (introduction by Margaret Canovan), The University of Chicago Press, Chicago, 1998. (1st ed., 1958). (志水速雄訳『人間の条件』ちくま学芸文庫、1994年)

OR : *On Revolution*, (introduction by Jonathan Schell), Penguin Books, New York, 2006. (1st pub., 1963; revised ed., 1965). (志水速雄訳『革命について』合同出版、1968年；ちくま学芸文庫、1995年。本稿では、主としてちくま学芸文庫版を使用し、必要に応じて合同出版版も参照した)

《注》

¹ Hannah Arendt の日本語表記は訳者・研究者によって揺れがある。志水速雄らは「ハンナ・アレント」と表記し、大久保和郎らは『全体主義の起原 1・2・3（新装版）』（みすず書房、1981年）において「ハナ・アレント」と表記する。本論文では、矢野久美子らが使う表記「ハンナ・アレント」で統一したが、引用部分や邦訳書物の引用においては、該当訳者の表記をそのまま使用した。同様に、OR も『革命論』と呼称されることもある（森分大輔ら）が、筆者は志水速雄の訳名である『革命について』という表記を統一的使用した。

² 研究者によっては、ドイツ語訳版の書名 *Vita activa, oder vom tätigen Leben* を取って、『活動的生』と訳す場合もある。出雲春明「始まりの条件 H. アレント『活動的生』第二七節をめぐって」（『倫理学』〈筑波大学倫理学原論研究会〉第24号、2008年）、森一郎「始まりの経験 『活動的生』第二四節への一注解」（『現象学年報』〈日本現象学会〉第22号、2006年）、同『死と誕生』東京大学出版会、2008年など。

³ 1982年4月20付 *The New York Times* 上、Peter L. Berger による Elisabeth Young-Bruehl, *HANNAH ARENDT For Love of the World*, Yale University Press, New Haven and London. 1982. (邦訳は荒川幾男・原一子・本間直子・宮内寿子訳『ハンナ・アレント伝』晶文社、1999年) への書評タイトルより。筆者はこのコピーを川崎

修の紹介と解説（川崎修『ハンナ・アレントの政治理論 アレント論集Ⅰ』岩波書店、2010年、237-243頁）で知った。

⁴ 太田哲男はアレントの政治思想の立ち位置を次のように評する。「(アレントの) 政治的立場は、保守的な外観を持ちつつも急進主義的（ラディカル）であった」(太田哲男『ハンナ＝アレント』清水書院、2001年、227頁)。

また同様の趣旨について、『革命について』の翻訳者・志水速雄は次のように述べる。「保守とか反動とか進歩とか……このような概念（これ自体近代の産物であるが）そのものが曖昧となっていて、時には全く逆に用いられることさえあるというのが今日の状況であってみれば、マルクス主義者が自らをそう名乗ることによって彼自身が「進歩的」になる保証はなにもない。……今日、知識人に要求されていることは……言葉の厳密な意味で、ラディカルになることである。さらにいえば、ラディカリズムに支えられたリアリストになることである。アレントはこのようリアリストの一人であろう。」(志水速雄「訳者あとがき」、合同出版版『革命について』425-426頁)

⁵ 山本圭は近年のアレントブームを次のように述べている。「特に東西冷戦が終結した 90 年代には、『アレント・ルネッサンス』と呼ばれる現象が起き、欧米においてはもちろんのこと、我が国に夥しい数のアレント研究が世に送り出された。」「アレント鉄道」「アレント切手」、そして「アレント通り」などを作りだすにいたり、ウォルター・ラクールはこの現象を「アレント・カルト (Arendt Cult)」と名指すほど」(以上、山本圭「古典評釈・著作批評 森分大輔『ハンナ・アレント研究——〈始まり〉と社会契約』『Autres』《名古屋大学》、第1号、2008年」、101頁)。

⁶ Margaret Canovan, *Hannah Arendt: A reinterpretation of her political thought*, Cambridge University Press, Cambridge, 1992, rep. 1995. p.155. 邦訳：寺島俊徳・伊藤洋典訳『アレント政治思想の再解釈』未来社、2004年、203頁。続けてカノヴァンは「しかしながら、『革命について』がこれまで無視され、ほとんど理解されてこなかったひとつの理由は、アレントの標準的な著

作に比べても、その著作がきわめて暗示的でありかつ内省的であるから」と述べつつ、別の箇所 (Canovan, *Hannah Arendt*, p.249. 邦訳 319 頁) では、「つまるところ、『革命について』が彼女の最も共和主義的な著作 her most republican book である」「『革命について』は」また(彼女の予定していた「政治学入門」がないために)『人間の条件』における政治の人間の文脈についての考察と違い、彼女の政治それ自体についての考え方の包括的な叙述に最も近いものであろう」と述べている。さらに『革命について』に特徴的なテーマは、振り返ってみれば、アレントの政治的著作全体に響いている」(Canovan, *Hannah Arendt*, p.249. 邦訳 320 頁)と、アレント政治思想上『革命について』を特に重要な著作であると見なしている。

⁷ 『革命について』ちくま学芸文庫版に収められた邦訳者・志水速雄の「訳者あとがき」(459-465頁)、川崎修の「解説」(467-478頁)、川原彰『現代市民社会論の新地平 〈アレント的モメント〉の再発見』有信堂高文社、2006年、95-123頁、太田『ハンナ＝アレント』194-202頁、川崎修『アレント 公共性の復権』講談社、2005年、千葉眞『アレントと現代』岩波書店、1996年、123頁などを参照のこと。なお、千葉『アレントと現代』125頁では、「革命論は、形式的にはこの自由論の枠組みの中に帰結する」とすら述べられている。かように、『革命について』は、歴史上のアメリカ革命とフランス革命を題材にとって現代の政治的なスタンスを表した政治思想上の書物と認識されてきたのである。

⁸ 例えば、千葉『アレントと現代』第4章「アレントと現代」(特に147-158頁)や川原『現代市民社会論の新地平』(特に116-121頁、243-255頁)など。

⁹ OR, p.10. 邦訳 24 頁。なお、邦訳では「はじまり」の読み違い(「……は、じまり……」のような所謂「ぎなた読み」になること)を防ぐために「はじまり」に傍点が振ってあるが、原文には beginning に対して特段強調表示はない。そのため、邦訳の引用に際して傍点は省略した。

¹⁰ OR, p.11. 邦訳 27 頁。

¹¹ 例えば、『人間の条件』には、「各人が生まれることによってもたらすことのできる新しい「始まり」を

世界の舞台の中に持ち込む活動なしには、「日の下には新しいものはない」（HC, p.204. 邦訳 328 頁）とあるほか、「第五章 活動」では随所で「はじまり」と「出生」の議論がなされている。

¹² OR, p.272. 邦訳 441-442 頁。

¹³ 『過去と未来の間』序「過去と未来の間の裂け目」では、現代の危機とは「伝統」という過去からの時間的連続性を失っていることであること、そして「記憶」と「回想」とは異なる言葉であるが、この危機を救いだすものが「想起 remembrance, remember」する精神であることが述べられている。さらにこの「過去と未来の間の裂け目」の出だしは、『革命について』第六章エンディングのモチーフであるフランスの詩人ルネ・シャール（René Char）の言葉「われわれの遺産は遺言一つなく残された *Notre héritage n'est précédé d'aucun testament*」の引用から始めている。このように『革命について』におけるアーレントの問題意識は（決して『人間の条件』ほかの政治思想的著作との関連を軽視するものではないが）、『過去と未来の間』に述べられる歴史性の回復の問題と大きく連関していると言える。BPF, p.3, 5-6. 邦訳 1, 4-5 頁。

¹⁴ 本書『革命について』は、ゲルトルート、カールのヤスパース夫妻に「尊敬と友情と愛 In reverence – in friendship – in love」を込めて捧げられたものである。なおアーレントは、1961 年 12 月 30 日付のヤスパース夫妻への手紙の中で、「『革命について』をほぼ書き終えたこと」「出来映えはよいと思っていること」等を告げ、ヤスパース夫妻にこの本を献じたい旨、打診をしていた。OR, 内表紙および太田『ハンナ＝アーレント』194 頁。

¹⁵ なお 2011 年は、中東および北アフリカ一帯でいわゆる「ジャスミン革命」（チュニジアの革命を指しての呼称）が勃発し、東欧で市民革命が起きた 1989 年前後以来、およそ 20 年ぶりに「革命の年」となった。筆者は、こうしたリアルタイムで進行する革命の現実を明らかにする視座を得る意味でも、全体主義との対決からシオニズム及びユダヤ人問題への対応、そしてアメリカ社会での政治的発言など様々にアクチュアルな言論を展開したアーレントの、革命とその「はじまり」の概念を包括的に明らかにしていきたいという願いと

問題意識を持っている。

¹⁶ 山口充「H. アーレントにおける「出生」の存在論的意味」（『愛媛大学教育学部紀要』第 53 巻第 1 号、2006 年）9 頁。カノヴァンの序文は HC, p.xvii.を見よ。

¹⁷ 小玉重夫「始まりの喪失と近代」（情況出版編集部編『ハンナ・アーレントを読む』情況出版、2001 年）153 頁。

¹⁸ 森川『〈始まり〉のアーレント』vi 頁。

¹⁹ 森川『〈始まり〉のアーレント』283 頁。

²⁰ 森分大輔『ハンナ・アーレント研究——〈始まり〉と社会契約』風行社、2007 年、42 頁。

(Received: May 31, 2012)

(Issued in internet Edition: July 1, 2012)